

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

近代京都と文化

Modern Kyoto and Culture

2. 研究代表者氏名

高木博志

3. 研究期間

2019 年 04 月 - 2022 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

本研究では、近代の京都と文化を対象としつつ相対化する。今日、京都は、年間 5500 万人以上が訪れる世界でもっとも人気のある観光都市である。「日本文化を創り出してきた京都」、「おもてなしの文化」、雅な貴族文化などとバラ色に表象され、文化庁移転のうたい文句にもなる。こうした京都イメージは、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面が強い。それに対して近代京都の文化について、民衆の生活・花街の性・差別の問題といった周縁性や、文化をめぐる政治や地域社会とのかかわりなどを含み込んだものとして捉えなおしてゆきたい。そのために、政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園など多様な歴史学の分野を専攻する研究者が、自分の専門領域から一歩踏み出して、近代京都の「文化」を広くとらえ直して考えてゆきたい。今まで行った、「近代京都研究」(2003～2005)「近代古都研究」(2006～10 年)「近代天皇制と社会」(2011～16 年)の共同研究を踏まえ、地域をめぐる学際的で批判的な共同研究会を展開したい。

This research project will look at modern Kyoto and modern culture, examining them in relation to each other. Kyoto, nowadays visited by more than 55 million people every year, is the most popular tourist city in the world. The city has been often described with expressions reminiscent of an elegant, aristocratic culture, such as “Kyoto, where the Japanese culture was born,” “the culture of hospitality”, which have also become the promotional lines for the relocation of the Agency of Cultural Affairs to Kyoto. Such images of Kyoto were clearly constructed politically and socially during the modern period. With this in mind, we would like to reconsider several topics concerning the culture of modern Kyoto, including the issue of

marginality, the life of the common people, sexuality in the red-light districts and the problem of discrimination, etc. We will also investigate the political significance of culture and its relations to local communities. The project members, specialists in various fields such as history, politics, education, social movements, economy, society, religion, knowledge, arts, cinema, literature, architecture, and garden design, among others, will step outside their areas of expertise to rethink the culture of modern Kyoto in a broader framework. Based on the results of collaborative research projects that we have conducted so far, i.e., "Research on Modern Kyoto" (2003-05), "Research on Modern "Old Capital"" (2006-10), "Modern Emperor System and Society" (2011-16), we plan to initiate a joint research project, where we will approach the topic of locality from an interdisciplinary and critical perspective.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は、近代京都の文化について全 10 回の研究会を行い、絵画・建築・文学など芸術分野に力点をおき、新出史料の紹介や検討を行った。特に本年度の活動としては、文献・絵画・建築・造園など多様な形態の新出資料や実践が各報告者により提示され、その性格や研究史上の意義について綿密な討論を重ねたことが特筆される。本研究班の特徴は、会議室に止まらず京都を始めとする近代都市を実際に目で見て議論を重ねる点にある。9月21日には「近代の彦根城と直弼顕彰」と題して班員・市川秀之氏の案内で彦根市内の史蹟を巡見した。また、班外のゲスト・スピーカーや大学以外の現場で調査・研究に携わる多くの研究者に報告の門戸を開いている点も重要な特徴である。4月20日にはウィスコンシン大学の大貫恵美子氏、5月13日には経済学研究科の大学院生・瀧本哲哉氏、学芸員の里見徳太郎氏など、班外からのゲスト・スピーカーを招き、活発な議論を行った。更に、即位の儀礼がまさに行われていた11月10日には、「現場から考える天皇制」と題した公開シンポジウムを行い、一般からも多くの参加者を得た。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

2019-04-06 近代仙台と民俗の変遷 発表者 佐藤 雅也 仙台市歴史民俗資料館

2019-04-20 人殺しの花—政治空間におけるコミュニケーションの不透明性 発表者 大貫
恵美子 ウィスコンシン大学

2019-05-13 戦間期における京都の遊郭—経済的側面の考察— 発表者 瀧本哲哉 京
都大学経済学研究科

日本画家・暉峰について 発表者 里見徳太郎 向日市

- 2019-06-09 京都と夢―南蛮・野長瀬晩花・花街 発表者 高木博志 人文研
太田喜二郎と藤井厚二 発表者 植田彩芳子 京都文化博物館
- 2019-07-06 名古屋城二之丸庭園の復元整備に向けて―絵図と発掘からの検証― 発表者 丸山宏 名城大学
- 2019-09-21 彦根巡見―近代の彦根城と直弼顕彰
- 2019-10-26 近代タイにおける「王都」と「古都」―ラタナコーシン(バンコク)王朝の行幸・儀礼・考古学行政に着目して― 発表者 日向伸介 大阪大学
- 2019-11-10 現場から考える天皇制 近代天皇制と天皇就任儀式 発表者 高木博志 人文研
「象徴天皇」とは何か? ―天皇制の中に生きる私たちの自由と権利と責任 発表者 池田浩士 京都大学
帝国の調整者としての女王―比較対象としてのイギリス 発表者 井野瀬久美恵 甲南大学
「反日」「非国民」「不敬」をつなぐもの―民族的他者を析出する装置としての天皇制 発表者 駒込武 京都大学
パンパンといわれたおんなたちと「天皇制」のおとこたち 発表者 茶園敏美 人文研
天皇制と現代文明の行方 発表者 福家崇洋 人文研
- 2019-11-30 天皇は何のためにあるのか:令和の皇位継承を考える 発表者 ジョン・グリーン 日本文化研究所
天皇の代替りと渋沢栄一―明治神宮をめぐる「意図せざる結果」― 発表者 平山昇 九州産業大学
- 2019-12-21 台湾への武徳殿の波及とその意味 発表者 中川理
- 2020-01-25 柳宗悦の京都時代―なぜ民芸運動は京都で始まったのか 発表者 土田真紀 同志社大学

8. 共同研究に関連した公表実績

なし

9. 研究班員

所内

高木博志、岩城卓二、永田知之、福家崇洋、高階絵里加、池田さなえ

学内

田中智子(教育学研究科)、谷川穰(文学研究科)、木下千花(人間・環境学研究科)、藤原学(人間・環境学研究科)、斎藤紅葉(法学研究科)

学外

イリナ・ホルカ(東京大学)、高久嶺之介(同志社大学)、中川理(京都工芸繊維大学)、北野裕

子(龍谷大学)、丸山宏(名城大学)、ジョン・ブリー(国際日本文化研究センター)、中野慎之(文化庁)、大矢敦子(京都文化博物館)、清水重敦(京都工芸繊維大学)、植田彩芳子(京都文化博物館)、加藤政洋(立命館大学)、市川秀之(滋賀県立大学)、長志珠絵(神戸大学)、玉城玲子(向日市文化資料館)、原田敬一(佛教大学)、国賀由美子(大谷大学)、山本真紗子(立命館大学)、本康宏史(金沢星稜大学)、平山昇(九州産業大学)、日向伸介(大阪大学)、北野裕子(龍谷大学)、鈴木則子(奈良女子大学)、細川光洋(静岡県立大学)、小川佐和子(北海道大学)、土田真紀(同志社大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	6 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	51 (22)	7 (4)	0 (0)	14 (13)
学内	3	4 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	17 (6)	1 (0)	0 (0)	1 (1)
国立大学	5	7 (3)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	26 (20)	7 (7)	0 (0)	4 (0)
公立大学	2	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学	8	9 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	32 (12)	1 (1)	0 (0)	4 (3)
大学共同利用機関法人	1	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	1	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (5)	2 (0)	0 (0)	2 (0)
民間機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	5 (5)
外国機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他	2	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	16 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	23	33 (13)	2 (1)	0 (0)	1 (1)	166 (82)	18 (12)	0 (0)	30 (22)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	33(29)
国際学術誌に掲載された論文数	3(3)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由			
掲載雑誌	掲 載 論 文 数	主なもの 論文名	発表者名
Joy Hendry ed. Understanding Japanese Society (5th edition). Routledge	1	Contested emperorship.	<u>John Breen</u>
Turque Diplomatique	1	Japonya'nın Emperyalist Geleceği: Bir Imparatorun Ikilemi	<u>John Breen</u>
Japan Focus	1	Abdication, Succession and Japan's Imperial Future: An Emperor's Dilemma	<u>John Breen</u>
産業考古学	1	金沢市で最後となった大西陶磁器顔料(株)の生産実態と残存設備の産業遺産的特徴	<u>本康宏史</u>
北陸史学	1	石川県における公文書の保存と活用をめぐって	<u>本康宏史</u>
デラシオン	1	「からくり」から「工芸」へ～大野弁吉の	<u>本康宏</u>

		足跡をたどる～	史
社会科学研究	1	近代地域史研究者にとっての台湾総督府文書目録編纂の意義	<u>本康宏</u> 史
メディア史研究	1	メディア史に鉄道は入っているか？ —近代の都市における社寺参詣を事例に—	平山 昇
地方研究	1	近代で道はどのように変わってくるか —京都府の道—	高久 嶺 之介
同志社大学人文科学研究所『社会科学』	1	北垣晋太郎の幕末	高久 嶺 之介
龍谷大学経済学論集	1	昭和恐慌と京都染織業界—『京都商工人名録』の分析を中心に—	北野 裕 子
人文学報	1	京都・染織祭の創設と展開—昭和恐慌・大衆消費社会・産業観光振興の交点—	北野 裕 子
歴史学研究	1	近世前期における河内狭山池集水域の開発とその影響	市川 秀 之
淡海文化財論叢	1	東近江市伊庭の社会組織～在地を中心に～	市川 秀 之
世界	1	近代天皇制と「史実と神話」—代替わりに考える	高木 博 志

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画

次年度の研究実施計画 2020年度には、美術史・文学・近代史・民俗学などの諸分野からなる、毎月、二人ずつの報告者で共同研究会を積み重ね、2021年度のまとめに向けて議論してゆきたい。特別な企画として、9月中旬に、世界遺産・文化的景観・歴史まちづくり方の三重指定されている宇治の巡見をおこなう。また研究班のメンバーである植田彩芳子を中心に京都文化博物館の特別展「舞妓モダン」展のシンポジウムに植田・高木博志・加藤政洋の3人が登壇し、美術史・歴史学・地理学から京都表象としての「舞妓」像の形成について論じる。11月7日に「大正期京都のロマン主義—吉井勇・花街・国展・映画」をテーマに、政治・社会におよぶものとして「ロマン主義」の概念を鍛えるべく、高木博志・細川光洋・加藤政洋・中野慎之・富田美香のメンバーで学際的なシンポジウムをおこなう。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 12 回 国内出張旅費(延べ 48 人)	支出予定額 (339,540 円)
	一般旅費	国内出張旅費(延べ 0 人)	支出予定額 (0)
海外旅費	渡航旅費	海外出張旅費(延べ 0 人)	支出予定額 (0)
	招聘旅費	招待人数(延べ 0 人)	支出予定額 (0)
謝金(講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金)			支出予定額 (60,460 円)
消耗品等経費			支出予定額 (0)
その他			支出予定額 (0)
合計			400,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果公表計画および今後の展開等 2021年度に『近代京都と文化の研究』という共同研究報告書を公刊予定である。

